I-28

絵画及び建築の存在形式の臨界点に関する研究
マレーヴィチによる絶対主義絵画の分析を介して
Study on the critical point of painting and architecturel
Through the analysis of paintings by Malevich absolute

○佐々木貴徳[1]，　田所辰之助[2]，
Takanori Sasaki[1], *Shinnosuke Tadokoro[2]

Is the trend of the modern architecture of today emphasizes social significance and feasibility, argue that emphasis is placed there. Building exists as a social one. You ought to constitute a comprehensive and factors. So architecture evaluation is made only in the framework of the social... Lost sight of the essence is the comprehensive factors influencing the repeated imitation of the buildings. This stagnation of architecture I think. Eliminate the social factors involved in building the reception of current state of stagnation of this architecture, and architecture of the contemporary thinking. Eliminate the social factors comprise the building process and through the results, to rediscover the essence of architecture, root is. For social factors in architecture too, focus on the avant-garde movement in painting.Reviewing the study and painting trim any factors to discredit the absolute principle.

序章

0-1．研究背景

昨今の現代建築の傾向は社会的意義や実現可能性が重視され議論もそこに重点が置かれている．建築が社会的なものとして存在し．社会的諸要因に包括され成立するため当然である．従って建築の評価も社会性の枠内のみでなされる．社会的諸要因に包括された建築は本質を見失い、建築物の模倣が繰り返される．これを建築の停滞と私は考える．この建築の停滞という現状を受容したうえで、建築に携わる社会的諸要因を排し建築の臨界点とは何か考える．

0-2．研究の目的、方法

建築を包括する社会的諸要因を排しその過程及び結果を通じ建築の本質、根源にあるものを再発見する。そこから現代建築に求められるものを論じる．

建築の社会的諸要因を排するために、絵画における前衛運動に着目する．ロシアの芸術家カジミール・マレーヴィチ(1718－1935)の絶対主義(シュプレマティスム)に着目し芸術の存在形式の臨界点の所在を探る。

１章　絶対主義の概要

1-1．時代背景

絶対主義とは 1915 年にカジミール・マレーヴィチにより始まったとされる絵画運動。当時ソ連は第一次世界大戦や闘争、革命の動乱の中にあった．絶対主義の運動は短命で 1919 年にマレーヴィチは絶対主義終了を宣言している。

1-2．理念、傾向

幾何学的形態を配置し色彩感覚以外を排除しようとしたもの．マレーヴィチは著書『無対象の世界』の中で以下のように述べている．「対象的なものそれ自体、絶対主義者には無意味であり　意識の表象は無価値なのだ.」この発言からも色彩感覚以外の一切を排そうとしていたことが分かる．

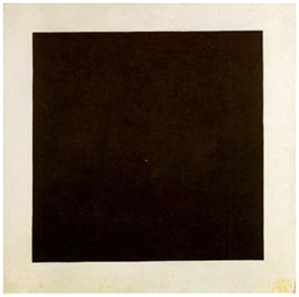

図 1　黒の正方形　カジミール・マレーヴィチ　油彩、カンバス
モスクワトレチャコフスキー美術館所蔵
1915

1-3．他運動との比較

絵画潮流はセザンヌにより初めて同一画面に多視点からみたモチーフの有り様を定着する手法が見出され、後を追うように未来派やキュビスムなどが台頭した．同時代のキュビスムや未来主義は絶対主義同様の構成主義的な平面構成は見られる．しかし決定的に異なるのは抽象的にはなっているが確実に何かの具象をもとにしており、あるいは何らかの寓意を持ったものとして存在している．絶対主義はこれら運動の克服、無対象性への脱出として対象を排した．

1-4．影響

絶対主義はキュビスムや未来派の影響を受けたことが分かる．加えて文学運動が絶対主義運動に影響した．ロシア未来派詩人は意味や倫理、対象から解放された無意味な音の羅列「ザーウミ(超意味言語)」の実験を行った．彼らは次のように述べている．「僕らは文法の規則に従って言葉の構成や言葉の発音を見ることをやめ、ただ支配的な言葉のみを文字の中に見ることからはじ

日大理工・学部・建築
日大理工・教授・建築

める．ぼくらはシンタックスを紊乱した.」こうして未来派詩人はシンタックスを破壊し理性や対象を超越したザーウミを詩の中心に据えた．この運動はマレーヴィチの絵画から対象を排し感覚の至高性を唱えた点に通じる．

また、マレーヴィチの作品は多くのロシア画家に影響を与えた．1960 年代のアメリカ抽象表現主義から脱却しようとするラインハートやティンゲリーへの影響も指摘される．藝術が藝術として成り立つ必要最小限の条件は何かという問いをマレーヴィチは残した．

1－5．絶対主義への動因

1915 年に絶対主義は始まったとされ動因はいくつかある．まず、第一次世界大戦により西欧との文化的繋がりが絶たれたこと．交流断絶によりロシア芸術を自己沈潜へ誘った．

次に青年同盟とギレアグループが上演する 太陽の征服　の舞台装置、衣装デザインを担当したこと．この舞台背景の幕デザインは黒い単純な正方形で構成されている. マレーヴィチはマチューシン宛の手紙に「太陽の征服の幕には黒い四角形が書かれており、それはあらゆる可能性の胎児で発展の中で恐ろしい力を持つようになるだろう．それは立方体や球体の父であり、絵画におけるその分離作用はすばらしい文化を生むのだ.」と記しておりこの 1913 年の制作が起因になっていることがわかる．1914 年にはマレーヴィチは青年同盟を退会し芸術の左翼的潮流からの独立を主張していた. こうして 1915 年に黒の上の白をはじめとした絶対主義絵画が台頭する．

1－6．絶対主義終息の理由

1919 年 12 月マレーヴィチは絶対主義が終了したことを宣言した. 終息の理由として二点挙げられる. 1920 年前後から政治的抑圧が始まったことが一つの理由だ. 絶対主義を放棄することで、退廃芸術として攻撃対象にされることを避けた．二点目は絶対主義が絵画に対するある種自己否定に似たものを持っていて、それが白の上の白で行きつくところまで行ったから．対象を排除し色彩すらも無に還元した後はカンバスそのものを否定するしかない．となると作品は形にならず画家としての職能を失うことに結果する．

2 章　建築への置換

2 - 1 マレーヴィチの建築運動

白の上の白を書いた 1919 年以降マレーヴィチに、は画布の上では残された領域がなかった．1922 年にレニングラードに移ってからマレーヴィチは絶対主義の三次元化という実験を画布の上のスケッチから実際の三次元オブジェで展開し始める．アルキテクトンとはこれを指す．しかし結局アルキテクトンは現実に三次元化されると矩形の集合でしかなかった．マレーヴィチに先立ってデスティルにおいてドゥースブルグやファントホッフも同様の実験を行ったが同様の結果となった. マレーヴィチは 1926 年に絶対主義的スカイスクレーパーと題された作品を制作したが
マンハッタンのスカイスクレーパーにモンタージュされたオブジェは三次元には違いないが立体的性格を欠いている．

図 2　シュプレマティスム的スカイスクレーパー　1926　出典　八束はじめ「ロシアアヴァンギャルド建築」Inax 叢書，1993. p 252

2 - 2．まとめ

マレーヴィチの絶対主義絵画を研究することになんの意味があるか．建築から社会的諸要因を削ぎ落とせば実用性は損なわれる．しかし絶対主義の研究を介して建築の臨界点に迫ることで現代建築が失った要素を何らかの形で見出せるのではないだろうか．

参考文献
[1]JE ボウルト『ロシアアヴァンギャルド芸術』岩波書店,1988
[2]カジミールマレーヴィチ『無対象の世界』バウハウス叢書，1992
[3]亀山郁夫『ロシアアヴァンギャルド』,岩波新書,1996
[4]八束はじめ『ロシアアヴァンギャルド建築』Inax 叢書，1993.
[5]ヴィーリミリマノフ『ロシアアヴァンギャルドと 20 世紀美的革命』未来社,2001
[6]八束はじめ『希望の空間』住まいの図書館出版局,1988
[7]中山公男『グレートアーティスト 26　マレーヴィチ』同朋舎出版,1990
参考論文
[1]斎藤久男「マレーヴィチカジミールセヴォリノヴィチ　絵画の極限を見た男」工学院大学共通課程研究論叢 43(1), p59-72, 2005
[2]秋元誠「真正なシュプレマティストとは　マレーヴィチと二つのまなざし」一橋研究 28(3), p87-97, 2003

日大理工・学部・建築
日大理工・教授・建築